

第2回 横須賀市立高等学校教育改革検討委員会

■日時 平成25年(2013年)10月30日(水) 14:00~16:00

■場所 横須賀市役所 3号館3階301会議室

■出席者 横須賀市立高等学校教育改革検討委員会委員(14人)

委員長	安彦 忠彦	神奈川大学特別招聘教授、名古屋大学名誉教授
委員長職務代理	松本 敬之介	市立横須賀総合高等学校 学校評議委員
委員	赤羽根 丈行	市PTA協議会 会長
	小野寺 昌枝	市立横須賀総合高等学校 総括教諭
	菊池 匡文	商工会議所 事務局長
	小林 雅巳	市立横須賀総合高等学校 PTA会長
	坂庭 修	市立横須賀総合高等学校 定時制教頭
	下川 紀子	市立鶴久保小学校 校長
	田中 靖和	市体育協会 理事長
	長井 興一郎	市民公募委員
	中山 俊史	市立横須賀総合高等学校 校長
	北條 文明	市民公募委員
	山岸 義之	市立横須賀総合高等学校 副校長
	吉田 和市	市立公郷中学校 校長
(欠席)	福田 敏人	県教育委員会教育局指導部高校教育企画課 課長

事務局(6人)

教育政策担当課長 菱沼 孝
教育政策担当主査 栗野 真一
教育政策担当指導主事 河野 和代
教育政策担当指導主事 中川 幸太
教育政策担当指導主事 原口 尚延
教育政策担当 志村 洸哉(記録者)

傍聴者(2人)

- 【議事】
- 1 横須賀市立高等学校の目指す学校像について
 - 2 その他

■資料

- 資料1 第1回「横須賀市立高等学校教育改革検討委員会」会議録
- 資料2 横須賀市立高等学校目指す学校像（市立高等学校の在り方の基本方針より抜粋）
- 資料3 横須賀の子ども像（指導の必携より抜粋）
- 資料4 横須賀総合高等学校の長期留学・短期留学の現状
- 資料5 高校制度の概要、総合学科について（中教審高校教育部会資料より）
- 資料6 神奈川県内の総合学科高校の学校目標等
- 資料7 横須賀総合高等学校の教員の異動状況
- 資料8 前回の検討委員会後に出された質問等
- 資料9 横須賀市立高等学校教育改革資料作成ワーキングチーム設置要綱
- 資料10 横須賀市立高等学校教育改革資料作成ワーキングチーム名簿

■会議概要

安彦委員長

委員の方々こんにちは。

それでは、定刻が過ぎましたので、吉田委員もまもなくおいでになると思いますので、始めたいと思います。第1回の会合で検討委員会の具体的な中身について今後どういう風に進めるのか、ある程度話をいたしました。ついては、2回以降の委員会の方向性について改めて、前回の会議から時間も経っていますので、確認をしておきたいと思います。特に私から申し上げたいことは、この検討委員会は、完全にオープンハンドで自由に議論できるという趣旨で、教育委員会内部だけでない外部の委員も含めた、この新しいメンバーで検討を始めるということでした。ですからこの点については、ある意味では思い込みのないようにしていただきたい。つまり、一部の委員の方々には、一定の方向がすでに決まっているのではないかとお考えの方もいるかと思いますが、その点については、事務局にも確認をして、そういうことはないということを私自身も確認しました。したがって、そういう前提で色々な資料のお求めもあったかと思います。この委員会はそのようにいろんな観点から検討していくということです。今日は、十分に時間がとれるかわかりませんが、議題としては、「今後の横須賀市立高等学校の目指す学校像について」ということで、審議を始めたいと思います。たぶん同じ趣旨の議題で、もう1回やらなければいけないと思いますが、まずは1回目ということで、今日の議事を進めたいと思います。それでは、議事に入ります前に、本日の定足数及び傍聴の関係について、事務局からお願いいたします。

事務局：教育政策担当主査 栗野

「横須賀市立高等学校教育改革検討委員会条例」第4条第2項の規定により、本委員会の開催にあたっては、半数以上の委員の出席が必要となりますが、本日は、福田委員から欠席の連絡を受けました。また、吉田委員は若干遅れて来られると連絡がありました。従い

まして、本日は、委員 15 名のうち 13 名が出席されていますので、委員会は成立しております。

また、この会議は、公開を原則とし、傍聴の定員を 10 名としております。本日の傍聴人は 2 名でございます。なお、第 1 回目の検討委員会と同様に会議録作成等のために録音をさせていただきますのでよろしくお願いいたします。以上でございます。

安彦委員長

それでは、議事に入ります。まず、会議資料について、事務局から確認をお願いいたします。

事務局：教育政策担当 河野

それでは、会議資料について確認させていただきます。事前に、送付させていただきましたので、ご一読頂いていると思いますが、

◆本日の次第

◆資料 1 第 1 回「横須賀市立高等学校教育改革検討委員会」会議録

は、すでに、8 月に送付させていただいております。

◆資料 2 横須賀市立高等学校の目指す学校像

これは、前回お示ししました昨年度のプロジェクトチームで策定した「市立高等学校の在り方の基本方針」から抜粋したものです。本日は、これをたたき台に、委員の皆様から目指す学校像についてのご意見をいただきたいと思います。また、1 ページおめくり頂くと、横須賀総合高校の学校教育目標等をまとめてあります。

◆資料 3 横須賀の子ども像（指導の必携）

平成 23 年度から平成 33 年度までの 11 年間の計画として、「横須賀市教育振興基本計画」を策定しました。この計画を策定、推進するに当たっての子どもの教育に関する考え方を「横須賀の子ども像」と「目指す子どもの教育の姿」により示しました。横須賀の子ども像として【人間性豊かな子ども】を掲げ、その具体的な姿として、6 つ書いてございます。指導の必携という横須賀の教員がもつ冊子にのせてございますので、そのページから引用したものです。

◆資料 4 横須賀総合高等学校の長期留学・短期留学の現状

横須賀総合高校がこれまで取り組んできた国際交流の資料ということで、提示させていただきます。横須賀総合高校と姉妹校であるオーストラリアのエラノラ高校との交換留学をはじめとして、さまざまな機会を利用して、長期あるいは短期の留学をしております。また、外国からの短期留学生を横須賀総合高校として受け入れているということです。真ん中から下に私費留学ということで長期留学について書いてありますが、今年度は、7 名の生徒が長期留学に行っているということで、県内でもかなり多い数ではないかと考えています。

◆資料5 高等学校制度の概要、総合学科について（高校教育部会の資料）

第1回目の検討委員会で出すべきでしたが、国の動きの資料として、平成23年から行われている中教審の高校教育部会の資料を一部抜粋させていただきました。

1, 2ページについては、高等学校制度の概要、3ページ以降は、総合学科ができた経緯や現状と課題について整理されております。

資料6以降は、前回の検討委員会の際に、資料作成依頼がありましたもので、

◆資料6 神奈川県内の総合学科高校の教育目標等

福田委員にお力をいただきまして、県内の総合学科高校の学校要覧と高校教育企画課で編集されている「輝けきみの明日」という次年度の入学生、つまり今の中学生が読むように作成された資料から抜粋したものです。

その学校の理念といったものが現わされているものが、教育目標とか、教育理念など学校によって表現は違いますが、一番左に整理しました。そのための具体的な取り組みといったようなことを2番目に整理しました。学校評価と対応しているところが多く、学校目標とか教育方針といった整理がされています。参考までに、総合学科の系列と特徴をのせました。

表現の仕方はさまざまですが、高校教育改革の推進に関する会議の4次報告にあるように、個性化・多様化の推進のために創設された総合学科ですので、【自己選択・自己決定、自立・自律、個性にあった進路選択、自己のキャリア形成、自己実現、主体的・創造的、人間としてのあり方・生き方、自己を拓く、キャリア教育、自らの進路を視野に入れ、目的意識をもって、コミュニケーション力、自主・自学、個性・適性】といったことばの入った教育目標、学校目標等が多かったと思います。系列については、8系列ある横須賀総合高校がもっとも系列としては多いですが、それぞれの特徴を表して6系列くらいを設定しています。

◆資料7は、横須賀総合高等学校の教員異動状況 です。

平成15年度の開校時は、市立横須賀高校、市立商業高校、市立工業高校の3校が一緒になりましたので、93名でスタートしています。その後、ご覧のように、毎年、数名ずつの退職・転勤者、着任者の異動により、現在は74名となっております。定時制についても、同様です。

全日制については、下の方を書いてございますが、10年の人事異動方針により、現在半数近い教員がこの10年の計画異動の対象となっております。

◆資料8は 北條委員から前回の検討委員会後に出された質問等 です。

第1回の会議録を確認していただく際に、1～7までは、委員の皆様にも送付させていただいておりましたが、4ページからとなります8番目の「国際バカロレア」について、北條委員から追加質問として、依頼がありましたので、資料として

追加させていただいております。

ご覧いただいておりますように、国際バカロレアはインターナショナルスクールの卒業生を対象としたものだと思いますが、この国際バカロレアのプログラムは、全人教育であり、そのカリキュラムが、学習指導要領が目指す「生きる力」の育成や、課題発見・解決能力、論理的思考力やコミュニケーション能力等、重要能力・スキルの確実な習得に資するものであるとして、グローバル人材育成推進会議の中間まとめでもバカロレア資格取得可能な又はそれに準じた学校を増やそうとしているようです。

資料を1枚おめくりいただくと、初等教育プログラム、中等教育プログラム、ディプロマ資格プログラムの3つバカロレアのプログラムがあって、国際バカロレア資格を取得するのは、最後のディプロマ資格になります。そのカリキュラムが5ページに載っております。教科群やカリキュラムモデルの中核というものがございませぬ。6ページに国際バカロレアの認定校になるにはということで、資料をまとめさせていただきました。これは国際バカロレアの方でその学校がバカロレアのプログラムが実行可能かIBOによる審査がございませぬ。その認定の手續ということで、①～③の手續を踏みその下にも書いてありますが、学校教育法の第1条にあたる、いわゆる1条校につきましては、バカロレアの方のプログラムと、1条校のカリキュラムということで両方やらなくてははいけなぬ。それにディプロマにつきましては、英語、フランス語、スペイン語のいずれかの言語で授業を行うことが求められるということで、かなり、ハードルが高いということがあって、中々数的には日本の中では、進んでいないということです。国際バカロレアの認定校になるということは、認定の手續きもあり、日本語ではない言語、英語になると思いますがそれで授業をしていかなければなりません。27年度から、一部の授業は日本語でも可能となるようで、文科省とIBの事務局の方でそういう話ができたこと、報道でありましたけれども、英語で他の教科の授業を行うことの可能な教員の配置や、その授業についてこれる生徒かどうかなど課題は多くあります。最後の7ページに、ディプロマプログラムを教えるために、教員に必要な資格ということでは、国が免許法上定めている高等学校の教員免許状を持っているうえに、IBの専門能力開発研修を受ける必要がある。施設の面でも、かなり高度な授業をとということで、例えば普通の日本の高等学校では設置されていない、化学の実験室にドラフトチャンバーといったものの設置が必要であるとか、その化学実験に劇薬等を使うので緊急用シャワーが必要であるとか、そのために、水周り等の施設の改修も行ったとのことでした。実際にDPを取った学校のお話ですと、そういった化学薬品を保管しておくためのロッカーですとか、図書室の整備ですとか、国際バカロレアの認定を受ける試験がございませぬので、世界統一試験のために、試験問題等を保管しておくための金庫室であるとか、そういったような施設等ももたなければならぬ。そういう意味でも、多くの課題があるかと思ひます。これが国際バカロレアの説明になります。

◆資料9 横須賀市立高等学校教育改革検討資料作成ワーキングチーム設置要綱

◆資料10 横須賀市立高等学校教育改革検討資料作成ワーキングチーム名簿

につきましては、前回皆様にご了解いただきました資料作成ワーキングチームに関する要綱と名簿です。

第1回のワーキングチームを10月15日に開催させていただき、本日提出した資料について検討いたしました。以上です。

安彦委員長

ありがとうございました。委員長としまして、最後に説明がありました、資料9、10 ワーキングチームのことを前回の会議で委員長に一任するということで了解いただいた結果、この資料9に従いまして、資料10のような8人の方をお願いをしたところ、それを今月中旬に第1回のワーキングチーム会議をしていただいたということでございます。その結果、今回の資料を用意していただいたということです。この点まずご報告をいたします。それでは、資料について、事務局に質問があれば、どんなところからでも結構ですのでお願いします。

北條委員

バカロレアのことで、国内で26校あるということですか。

事務局：教育政策担当 河野

はい。

北條委員

それを国内で200校を目指しているということですか。

事務局：教育政策担当 河野

はい。なかなか課題が多くて進んでいかないということで、取り組みを始めているということですが。

北條委員

200というと、かなり多いのかなとびっくりしました。ありがとうございます。

安彦委員長

国（文部科学省）のやることですので、手を挙げてやりたいといえ、今の段階では比較的国は、どんどんやってみてはどうかと思います。ただ実際に、東京都あたりで動いていますが、教員の能力とか、語学も含めてまだ十分条件が整わないようです。私学の立命館高校は認定されているのですが、立命館の教員から、都教委が研修を受ける場をつくって、どういうことが条件になるか調べているところです。この研修会は自発的な参加

ですけれども、現場の先生の英語の夏の研修などでは、都教委はその中から、I Bに移行できるような、優秀な先生を見つけられないかと、探しているといった段階です。まだ、構想はあるけれども、条件整備に努めているという、そんな段階です。

他にいかがでしょうか。北條委員から出された資料1～7まではこの場の全員で討論できる問題だと思いますが、ご遠慮なくご意見いただければと思います。例えば、資料2、4につきましては、横須賀総合高校の資料ですので、横須賀総合高校の方から何か補足はございますか。

中山委員

前回ご説明させていただきましたので、新たに説明を加えるところはないかと思います。ご質問があればと思います。ただ、資料2については事務局の方の昨年度のプロジェクトチームからの資料ということで、高校の資料ではございません。

北條委員

議論に入る前に確認ですが、学校像というものがまだよく理解できていないのですが、これはよく言うミッションとかビジョンとかそういうものを指しているのか、学校像というものと、教育目標とか、人間像とか色々言葉が出てきまして、その関係性をできましたら、教えていただきたい。

事務局：教育政策担当 河野

学校教育目標自体は、学校が定めるものだと捉えています。ただ、市として、1つの学校を作る、所管するにあたって、ミッションだとか、ビジョンとか、目指す人間像、どのような子ども達に育てて欲しいというようなものが、学校像というものになります。そのあたりを参考にするために、県内の総合学科高校の資料を集めさせていただいたのですが、一番左側を書いてあるものが、理念的なもの、学校像的なもの。そのとなりが、各学校が、学校目標として具体的な取組、計画を書いたもの。この場では、目指す学校像ということで、ミッションであるとか、使命であるとか、ビジョンであるとか、横須賀市が持っている後期中等教育の目指す姿がどういうものであるのかと、そういうことをここでお話いただきたいという風に考えております。よろしいでしょうか。

北條委員

大体ミッションに近いのかなという考えがありましたが、今回の学校像というのは、とりあえず10年後までをイメージしたミッションが学校像ですか。それとも期限を決めていないものですか。

事務局：教育政策担当 河野

基本的には今、横須賀が1校持っている高等学校がどんな学校に、なればよいかということです。1年間で学校が急に変わるわけではないので、教育改革をしていく中で、こうい

う学校にしていきたいのだというもので、特に、10年であるとか、20年であるとかスパンを設けてとは考えておりません。

安彦委員長

かなり、大雑把なイメージということで、もちろん具体的な姿をお話の中に混ぜても一向に構いません。全体像がぼやけている訳でなくて、かえって具体的なことの方がわかりやすいという面もあると思います。そういったことも遠慮なく出してもらえればよいので、いかがでしょう。それぞれの資料で気になった点はございませんか。

中山委員

資料8ですけれども、今北條委員からも、目指す学校像とか、学校教育目標といった話がありましたけれども、この中で、資料8の1番、学校教育目標についての欄外のところに、「学校教育目標の見直しは、いずれ本検討委員会で議論することになると思います。」と、あり、議論していただくことと思いますが、先ほどのお話のとおり、学校教育目標については、学校が定めるものであると思っているので、最終的な決定は学校に委ねることとよろしいでしょうか。こちらの委員の皆さまの意見は参考にさせていただきますけれども、最終的な決定は、学校に任せるということとよろしいでしょうか。

事務局：教育政策担当 河野

はい。そのように思っております。

安彦委員長

この言葉は曖昧で、学校の教育目標なのか、学校教育の目標なのか、「の」をどこに入れるかで意味が違ってくる。「学校教育の目標」というのは、これは、学校教育法に書いてあったりしておりまして、勝手には言えない。ですから、中山委員がおっしゃいましたが、今は「学校の教育目標」を各学校が大きな方針ということで決めている。そういう性質のもので。その辺の確認をされたのだと思います。ただ大雑把に、横須賀総合高校の学校像としてこういう風に描いた場合は、こんな目標が掲げられるのではないかと、例えば例示というか、ミッションみたいなものも入れて、ご意見を出していただければいいと思います。

長井委員

前回の検討委員会で学校教育目標の見直しの必要はないという話が出たように記憶していますが、学校の教育目標というのは、例えば私立学校には、建学の精神というのがあります。この建学の精神というものは、1年ごとに変わったり、10年で変わったりすることはない、永久に変わらないものであると思います。ただ、教育の内容・実践は時代に沿ったものに変えていかないと。変えていけないものと変えていいものという二つのもので学校の中にはあると思います。学校教育目標というものは、そう簡単に変えるもので

はないと思っています。

安彦委員長

この点は、非常に大事な観点を含んでおりますので、他の方のご意見をいただければと思います。これは最初の会の議論でも、そもそもこういうものについて、横須賀総合高校の教員からはどうなのかという、内部の意向をきちっと反映させて、あるいは受けてやるべきだという意見がありました。この点、基本的には、あらゆる層からのご意見をいただかなくてはいけないという点には私も同感いたしました。今、長井委員がおっしゃったこととの違いは、本校は私学ではありません。1校とはいえ、公立です。なので、本校の教員が、こうでなくてはならない、そうでなくてはならないとは言えないはず。つまり、公立ですから、市民が作った、市民の税金で作った学校ですので、私達外部の人間が入って、自分達はこういう学校が欲しいといえる場を作っている、という前提で、この検討委員会は作られている。この点は誤解のないようにといたしますか、私学ではないことをしっかりと認識しておいていただかないといけません。あまり本校内部からの意向のことを言い過ぎますと、市民から、我々も意見が言える立場だと、反論されてしまいますので、十分に踏まえていただきたいと思います。1校しかないものですから、非常に扱いが難しいといえますが、その点は承知しておかなくてはなりません。

この点も、ちょうど資料に出された項目がありますので、この項目に沿ってでも構いませんから、今のような学校教育目標についてはいかがですか。見直しは必要ないという意見もあって、その部分とそうでない部分としっかり分けて示すべきではないかと思えます。

※吉田委員到着

菊池委員

質問ということで、私も北條委員がおっしゃっているのと同じなわけですけれども、この改革検討委員会の本質的なテーマを、どこから切り口を持っていけばいいのか非常に悩んでいるので、そういう事を前提として、教えていただきたいと思えます。資料5の高等学校制度の概要の中に、総合学科の設立当初の理念というものがある。これが平成3年の中教審の答申からということでした。平成3年というと今から22年前、それから、その下にありますように、これを受けて高等学校教育の改革の推進に関する会議が平成5年の2月ということで、こういうものがアップされてから時間も経過している。横須賀総合高校が設立されたのが、今から10年前ということで、ここに書いているようなこと、将来の職業選択を視野に入れたとか、学ぶことの楽しさや成就感とか、偏差値の尺度を打破するとか、生涯学習の機関としてなど色々なキーワードがあると思うのですが、果たして、ここに記述されていることが、今現状の総合学校と比較をした時に、どれだけ合致しているのか、もしくは課題はあるのであろうか、わかれば教えていただきたい。

安彦委員長

どうでしょうか。この点の答えは学校からですかね。手元に資料がないと思いますが、一般的なことでもどうでしょうか。

菊池委員

感覚的なものでも構いません。

中山委員

総合学科が設立されてから、早いところでは20年ということで、全国的にも、総合学科の成果というものが、どのような形で表れているのか、というのを問われている。今言われたような意義が実態として達成できているのかというところで、先に課題の方からいうと、本校としても卒業生等の声を、どうやって引き上げてくるかということが課題になっています。10周年記念ということで冊子を作り、その中で卒業生の声という形であげていますが、統計的なデータですとなかなか取りにくいことがあり、本当に成果が表れているのかということが、本校にとっても課題ですし、全国的に総合学科を持っている学校の課題であると思っています。そういった中で、ここにあげられているような、総合学科の意義という部分については、本校では、かなり設立の理念にのっとり様々なものを進めていると自負しています。先ほど言われた、選択数の多さであったり、生徒の希望にのりつつ進路指導であったりとか、理念をきちんと踏まえたうえで、これを念頭に置きながら学校運営をしてきた。生徒の様子をみても、これは感覚的なものですが、学校説明会をやった時に、生徒が説明をする部分があるのですが、自分の言葉で、自分の思いで、こういう選択をしているという子がたくさんいますし、総合的な学習の時間、自分の将来を考えていくような、そういう時間2年、3年次に設定しておりますけれども、その研究課題と、進路先がかなり合致しているという子が多いということが、実感として思うことです。

山岸委員

今ここで、総合学科を設ける意義が3点出ていますけれども、開校以来一番軸に考えてきたことは、総合学科のキーワードとしては、個性化、多様化、弾力化だと思っていますので、いかに柔軟な教育課程システムを作るか、それから、多様な科目を用意するか、それには当然生徒達に選択する力をつけていかななくてはいけませんから、選択させる力を含めた、キャリア教育、こういうものを重視して教育活動をやってきたつもりです。それについての成果は、それなりに出ているのではないかと、先ほど中山委員も言いましたように、アンケート調査や卒業生の声から伺えると、私は考えております。

安彦委員長

むしろそれだと、成果の方が出てきているということですね。課題の方はどうですか。

中山委員

先ほどお話をしたとおり、今お話した成果も肌感覚の部分もあって、本当になりたい自分に向かって学習していった、それに向かって卒業していった、その後本当にそれが追及できているのか、そういう仕事をできているのか、という部分まで追跡ができていないということです。

安彦委員長

なかなか難しいところで、そういった追跡調査というものができないのですけれども。就職してしまうと、色んな要素が別途入ってくるのです。河合塾がそういった10年の追跡調査を、また文科省も似たものをやろうとしています。しかし、そういう色んな要素が入ってくるものですから、なかなかやれないで、会社等に入って3年目まではしているのですけれど、まだやりだしたばかりです。

菊池委員

今色々ご説明いただいた中で、これも我々が肌で感じる話なのですが、現状の横須賀総合高校10年を経て、成果も出しているし、親御さん、生徒さんの満足度というものも、概ねよいのではないかと思います。正直、先ほどの課題というものが明確になっていない。課題もはっきりと顕在化しているわけでもないので、改革という言葉と、我々がどこの部分に意見を言っているものか、課題がわかれば、そこから入り込むことは可能なのですが、意見を言うのも、オブラートに包むようなことになって申し訳ないのですけれども、学校現場の先生方の意見を聞きながら、自分の意見も言えればと思いますので、このような繰り返し、いくつか続くのかなと思います。

安彦委員長

この点は、第1回目の時に、内部の横須賀総合高等学校教育改革検討プロジェクトチームが昨年の12月に報告書を出しておりますが、皆さん1回目はその資料をいただいたかと思いますが、そこであがっている「現状と課題」というものの復習になります。課題のところには、系列、科目の設置と履修状況ということについては、4年生大学への進学が多いことを踏まえると、その実態に即した教育課程の編成の観点から課題がある。進路指導については、大学への進学が増える中、大学へのより確実な合格を狙うがために、本来の目標とは異なる、学校の指定校推薦を選ぶ場合、出来るだけ楽に大学へ入りたいと、大学から指定を受けられればすんなりと入れる、それで良いだろうと、そちらの方が優先して、自分の本来の目標を、高い志を持って自己実現を図るということになかなか目が向かない。大学入学のほうに流されやすい。3点目の学習指導の方では、基本的に進学希望が多い状況に反して、生徒の学力向上やその取組に課題がある。生徒の進学希望に導く教員の指導力向上を図ること。これも切り離せない課題。教員の配置が、今日は出せるデータで出させていただいていますけれども、現状の履修状況と教員の教科とのバランス調整、教育改革の方向性に沿った人事配置といったものが重要だと。そして年齢バランスのことが課題だ

と。それから、市立唯一の高校としての存在価値ということで、教育を受ける機会の格差が生じないように、基本的に県が高校を設置することを踏まえると、中核市として高校を持つ意味を明確にする意味がある、横須賀市として持つ意義も検討して欲しいと。以上のことが、内部の検討チームから課題として出されている。これは復習になります。

菊池委員

私もそれを前回拝見させてもらって、確かに課題として顕在化していると思いますが、あくまでもマネジメント、学校運営の課題であって、制度改革につながる課題にはなかなかリンクしない。最後の市としてこの学校があるべき姿、これが制度改革というテーマに合致するかもしれませんが、それ以外のものは、現状の現場マネジメント改革というそこだけを突き詰めればいいかもしれないが、恐らく、今ここで議論されようとしていることは、もっと大きなくりの意義ということになると思うので、そこらへんのどこをポイントにすればいいかわからないのも確かです。

安彦委員長

おっしゃるとおり、今あげた課題は、短期的な見通しの中での課題になっておりまして、この検討委員会では、中長期的に、先ほど 10 年ということが出ましたが、10 年と限らず、長期的にこの学校をどうしていったらいいのか、それを考えて欲しいということですから、課題という言葉があまり適当ではないのかもしれませんが。ある意味で課題を踏まえながら、今後横須賀市として、総合高校だけでいいのか、あるいは、総合高校の在り方についてどうなのであろう、そういう意味で制度も含めて、検討していいですよということです。本委員会は、あまり狭く考えずに、そういう趣旨の委員会だということ、それが本来求められている我々の役割だと思います。ますます漠然となりうまく整理できないのですが、思いつきでもなんでも、今回北條委員の方から I B など出してもらったのは、非常に良い検討の課題を出していただいたと思います。他にはどうでしょう。学校像、目標、目的に関してですが、それ以外でもどうぞ。

赤羽根委員

確認なのですが、1 回目の資料がなくて、そちらに書いてあれば大変失礼なのですが、参考までに、横須賀総合高校の学年の定数と、クラス数、全生徒数というものを教えてくださいませんか。

山岸委員

全日制の方は、この間次年度の募集定員が発表になりましたけれども、開校以来 1 年次 320 名、8 クラスの募集です。ですから、3 つの年次で 24 学級が、全日制の規模です。960 名なのですけれども、進路変更する生徒もいるので、若干引っ込みがあります。また、3 年間で卒業をしなかった生徒も残っていますので、若干その数も加わりますけれども、基本としては 960 名。8 学級×3 年次です。

坂庭委員

定時の方は、70名が基本なので、2クラス70名で毎年募集をして、4学年で280名なのですが、3年間で卒業する生徒もいますので、実際はそれを欠いているというのが現状です。

安彦委員長

人数で何か背景がありましたか。

赤羽根委員

資料7で、10年間で、着任者より離任者のほうがはるかに多くて、第1回目の時にも、教職員の方々のバランスが、人数的なもの、年齢的なものとあるという中で、この中には年齢構成は書かれていないですけれども、今伺った、960名、24学級で、この74名という先生方が、全日制でいうと、適当であるのかわからないので、特に総合高校ですと、系列で、科目数が多く、専門性が高い中で、現場はどのように感じているのかと思うのですが。

山岸委員

前回お話したかもしれませんが、開校当初は3校1つになりましたので、希望する先生方も来ていただいている、そこで一緒に学校づくりをしていただくという、そういうスタートを切りましたが、基本的には、法律で学校規模に応じて先生の人数は決められております。退職とか、異動によって、現在は決められた人数にほとんど落ち着いた数がこの程度です。足りるかどうかは、どういう科目を置くのかにもよりますけれども、定数法に沿って教育課程は作っていくことになるのですが、参考になるかはわかりませんが、全日制普通科の同規模の学校に比べると、総合学科の定数は13名ほど多いというように聞いております。多様な科目が設置できるように定数法はなっている。学校として、もっと多くおきたいという色々なニーズはあると思いますので、そのあたりは多少出たりはしますけれども、現状ではこういうところです。

田中委員

横須賀総合高校の評判を聞くと、大変良い学校なのです。悪いという人はあまりいなくて、及第点以上の学校だと思っております。けれども、トップというか、なにをトップというかはわかりませんが、そこまではいけない。実際にいっていない。そこをいかにすればいいのか。理念などは変えたりはするけど、そういうことは難しく、言えない。だったら、横須賀総合高校に普通科を作って、進学をよくすると、これは極端だが、そういう意見しかなかく出てこなくて、大変素晴らしい学校だと思いますが、横須賀総合高校が今置かれている、物足りないところをもっと研究して、市立1校だから、今いる生徒達の満足度を引き上げていくという、そういうものを話していったほうが、よいのではないのでしょうか。後は、総合学科を辞めてしまえ、普通科にもっていこうとかになってしまうので、

総合高校を引き上げていくには、今の理念、教育目標で、理念にあった教育課程をどうやっていくのか、そういった具体的な形を操作していきながら、あとは進学のことはいかにいけばいいのだろうかとか、悩んでいる進学のこととかそういうものしかなか言えない、という風に、自分は思っています。大変評判はいいです。中学の校長先生達に聞いても、物足りないものはあるけれども評判はいいのです。ざっくりばらんな意見ですが、そこからさらにやっていくのは、どういう形の、教育活動、教育目標を、設定しながらやっていくのがいいのかということだと思います。

安彦委員長

そういう意見で問題ありませんので、個人的な意見で、こういう風になったらいいのではないかというものでよいのでお願いします。全体の総合高校のスタイルはあったとしても、普通科、普通コースというものも作って、という極端なものでも構いません。

田中委員

横須賀市立の高校ですから、県全体が学区だったら、パーセンテージを決めて、横須賀の子どもを多く入れた方がよいという意見もあります。横須賀にもっとやさしい学校であって欲しいなと思います。他は、県の何パーセントという地域の人を入れているようなこととか。あと、管理職の人事ですけれども、最初のスタートは公募で校長を選んでいて、熊谷先生なのですが、大変良い校長先生で4年くらいやられています、基礎を作っていました。そこからぱったり、公募もしないし、そしてその後の人事が2年3年で短い。管理職の先生が、人物は大変素晴らしいと思うのですけれども、そうすると、学校に入った時に、長期的な展望とか考えた時に、4、5年やらないとわかってこないと思うのですね。実際に、私たちも管理職をやった時に、高校から中学に行った時、最初ほとんどわからなかった。勉強してやるのですけれども、教育課程もわからない、そういう中で入っていくものから、なかなか数年だと難しいです。高校の先生方も、自分の学校こういう風にしたいという方はいっぱいいると思うのですが、そういう先生方の道とか、気持ちとか、そういうものを含めて管理職だったら、長期的な展望で横須賀総合高校をこうしていきたいという、職員達の意識も違ってくると思うのです。2、3年で変わってしまうと、絶対的についていけません。よほど知っている人でないと。そのようなことが見ているとあると思います。人事のことがあります。あと、部活動ですけれども、ある程度の線はいつていると思うのですけれども、スポーツで目標があるのなら、推薦でとるべきだと思います。横須賀の良い人材をとるべきだと思います。今は高校で育てるという時代ではないのですよ。横須賀総合高校の選手として出るのなら、トップをとる気持ちの子を入れて、よしやろうという気持ちで、やっていかないといけないなと思います。それは、推薦制度に問題があるのではないのでしょうか。だから横須賀独自の入試をやればいいのですよ。県のそのままではなく、横須賀総合高校に合致した推薦の制度をとればいいと思います。そういうものが、他県にあると思うので、そういうものを踏まえて、僕は今体育協会の理事長として出ているものですから、スポーツのことを言いますが、横須賀でこうだっているのがす

ごく嬉しいのです。ただそこは総合高校が先陣切ってやるのだと思います。ざっくばらんに申しましたが、そんな感じがしています。

安彦委員長

どうぞ、ご遠慮なく、こういうご意見を出していただいて結構です。

北条委員

話としてまとまっていないのですけれども、横須賀で1つだけの市立高校ということで、横須賀をもっと意識していいと思います。横須賀の市民をもっと意識してもいいのかなと。先ほども出ましたけれども、生涯学習機関という話も出ていましたし、今は中学から上がってくる生徒が対象ということになっていると思いますが、それを卒業生、または卒業生でなくても、キャリアをやられているのでキャリア教育をされて、見直して戻ってこられるとか、勉強をし直せるとか、資格を取りなおせるとか、高校に属していなくても、市民が必要があれば、希望があれば、また高等教育を受けさせてもらえるようなことが良いかなと思います。となると、先ほどの学校像というところで、かなり変わってくると思うのですけれども、一般にいう生徒だけでなく、もう少し広い意味で、誰を迎え入れるか、誰のために存在するのかということから議論したほうがいいのかと思います。

安彦委員長

私も、そういう視点で中教審でも発言したことがあるのですけれども、国のレベルでは到底すぐには動けないですね。けれど、横須賀市はもっとそういうのを考えて、共通する点は、生涯学習機関にすると、もう義務教育ではないですから、18歳までというのを決める必要はないので、学年制をやめて単位制だけにしてしまい、何年かけてでもいい、卒業生や社会人が入ってきて、資格が取れるような生涯学習機関の1つと位置付けてしまうのは可能ではないかと発言したのですけれども、なかなか国のレベルでは賛成は得られませんでした。地方でそういう視点をお持ちになって部分的にでもやってみたいとなれば、私は個人的には賛成ですけれども。ほかにはいかがでしょう。まず今日はなんでも出してください、まだもう1回ありますので。

小林委員

中にいる人間としてなんですけれど、資料5の現在抱えている課題、保護者、中学生、地域への理解が高まっていないのが結構高い数字なのです。このあたりの問題として、教育指導方針として地域にしっかりと根付いた、社会に愛される共存できる学校を目指していくためには、ここの評価、家庭と、地域、今まで色々なことをやって、横須賀総合高校は色々なイベントにも参加して、協力をして、小野寺委員を中心に吹奏楽等イベントにも参加していただいております。けれども、やっているとは思っているのですけれども、これをより一層、まだ学校には発信できる情報はたくさんあると思うのですよ。そういうのを今一度見直して、久里浜の商店街と協力とか、観光協会等、そういう情報の発信をいかに、家庭、

地域、学校が重なってできるかということ、話し合ってみるのもおもしろいかなと思います。自分は商店街の会長をやらせてもらって、1つの案として、商店街のシャッターに美術部の方をお願いして、久里浜の街と横須賀総合高校の絵を書くとか、ボードを使って、学校のイベントスケジュールの発信を行ったりもできますし、コンピュータ部をお願いして、商店街の人たちと、一般の人たちで勉強会をやるとか、そのようなイベントの方向性ができないのかなということの中で考えています。

安彦委員長

地域との関係はむしろ作りやすいですね。全県とか通学区域を広げている例の方が多い訳ですから。

小林委員

地域と学校が一体となっているというケースは色々なところにあると思うのですがね。7、8年前までは横須賀総合高校の生徒と、商業祭という1日のイベントのような感じでフリーマーケットをして、お店の店主と、横須賀総合高校の生徒が一つになってやったり、畳の技術を教えたりとか、イベントはできた学校なのですけれども、下地というものはある地域だと思いますので、またより一層深めていけば、地域、家庭、学校、個人というスクラムががっちり組めるかなと思います。

小野寺委員

小林委員の話を受けて、学校の中のPR、広報を担当している身としては、申し訳ないなと、宣伝の仕方は、もっと工夫を重ねていくべきだなと思っております。ただ、課題の中の理解が深まっていないということについては、例えば今年文化祭を行いました、二日間で4,000人のお客様に来ていただいて、夏の体験授業をやっても、中学生、保護者が1,000人以上集まってくれているということだと思いますと、その都度の取組に関しては、中学生も、地域の方も、保護者の方も総合高校に関心を持ってくださっているのかなと思います。ただ、それがなかなか浸透していかないということは、工夫が必要かなと思います。あと、生徒のここ数年の状況としては、今までの生徒は、三浦半島の中の一つとして、横須賀総合高校をみて選択している生徒が多かったのですけれども、ここ数年、1、2年ですけれども、入試制度が変わったりする中で、総合学科を見て、金沢総合等を見て、うちの学校を選んでくれている生徒が増えている気がします。数字で表しているわけではないですが、授業の中で聞いたりした中ではそういうのがあるので、横須賀総合高校、総合学科としての意識は少しずつ、中学生の中では変わってきているのかなと思いますので、これからさらに色々工夫を重ねていく必要があると思っています。

安彦委員長

むしろ、総合学科の一つとして、本校の価値を見始めてきていると。地域よりも、高校の特色を認識して、選んでくれるようになってきたということですね。

松本委員

小林委員から、身内から見ると割りと厳しい意見かと思ったのですが、10年経った中では、今小野寺委員から話しがあったように、地域との融合性はあるのではないのでしょうか。久里浜地区じゃない方達は、生徒さん達をどのように引っ張り出したらいいのかそれがわからないというのがあると思うのですね。私はたまたま、青少年育成団体のことをやっていますので、内部的にも評議委員ということもやっていますので、校長先生に無理を言って、ダンス部と、ダブルダッチをやっている子達を団体のイベントに引っ張り出すということをしようとしていますけれども、そういう術を知っていればできるのだけれども、中々市民がそのように引っ張り出していいのかがわからないというのが、実情だと思っています。

安彦委員長

私も先だって、横須賀総合高校の総合的学習の時間、「羅針」の時間の発表を見に来ましたけれども、なかなか子ども達はよく地域に出ていたり、逆に地域の方からも長年「羅針」に協力していただいている、地域の方がお越しくださって、子ども達の発表を聞いていただいている、また、色々な助言もしてくださっている様子を見てですね、非常に上手くやっているなと思いました。子ども達も、中身や発表に大変熱意があって、レベルは私個人的にはまだ不満ですけれども、熱意、意欲があってやっており、しかもそれが自分の将来の仕事、職業と結びついている例が7割、10人のうち7人がそういう風になっている。普通科では考えられない。そういう点では非常に意欲的ですよね。そういう事を見てですね、こういう子ども達なら良く育つだろうなと思います。全体として、国の中央教育審議会の方でも、先だって総合高校についての視察もしたのですけれども、国の方の委員の方々も大体総合高校に対する評価は高いです。もちろん個々の総合高校の中には、問題を抱えているところもありますけれども、総体としては、非常に評価が高くて、いわゆる、企業代表の方達の委員からも、総合高校の評価は高いです。普通科出身の生徒よりもキャリア意識ができていて、職業に対する考えが育っている、社会人とのコミュニケーションのとり方、いわゆるしつけが身につけている等々、良い評価の方が多かったので、非常に印象的でした。私は少し、「総合」というのは、言葉は「総合」ですけれども、中身は大変難しいものはずなのです。ですから、子どももどのレベルの総合をやるか、下手すれば、遊んで終わりのようなことが起きてしまうので、あまり素直に、ストレートには評価しないのですけれども、横須賀総合高校の子どもの育ちは、非常に良い部類に入っていると思います。そういう意味では、横須賀総合高校の課題という意味では、みなさんがおっしゃったような条件整備の面と子どもの育ちと、学校全体の性格、地域、生涯学習的な学校の性格といった、いくつかの視点ができていると思いますので、こんな方向もあるのだというようなご意見があれば、どうぞご自由に出していただけたらと思います。良い点ばかりではないと思いますので、この点はどうなんだという問題点も出せたら、是非出していただきたいと思っています。

菊池委員

問題点ではないのですが、これも理想的なものになるかもしれませんが、私ども、商工会議所ですので、地域産業の役割を担っているのですが、こうした市唯一の教育機関で学んだ生徒達が、できれば地域に愛着を持って、地域で活躍ができる場を作るのが、理想だと思っているのです。単に学ぶだけの機関ではなくて、地域に根ざして活躍してくれるような、もちろんそのためには受け皿が必要になるのですが、ではそのためには地域に対する愛着をどのように持ってもらうか。というものが非常に重要なキーワードになってくると思います。冒頭にもありましたけれども、国際海の手文化都市という都市を横須賀市は標榜しているということで、どれだけ浸透しているかは別として、この地域の特徴としては国際というキーワードはやはりみなさんどこかに思っている。産業とかもろもろ考えて行くときに、国際人の育成は非常に重要な人材育成になるんじゃないかと思います。そういうものを色々つなぎ合わせる中で、特色的な国際人を養成して、きちんと地域で育てて、そして地域で活躍できるような場を設けるようなですね、一連の先の道筋が見えるような、そういった特色的な部分を出すのも一つの手かなと思います。

安彦委員長

この点は既に、横須賀総合高校も掲げている部分でもあるが、もっと鋭角的にということですね。

菊池委員

はい、そうです。

北條委員

国際人になればなるほど、横須賀に留まらない気がする。

菊池委員

北條委員それはわかるのですが、それは拠点が無いからです。なので先程、「受け皿」という話をしました。学ぶ機関としてだけでなく受け皿としての機関もちゃんと作らないといけないと、その方々が学んだことを生かせる場、それを横須賀で作れる素地があるとなれば、これは良い、悪い別にして、一つの特徴として米海軍基地がある。この中に都市としてある。そういった都市ともっと交流を深めて、お互いの人事交流があって、そして都市機能を強化する。ここに、拠点ができることによって、あらゆる情報だとか、拠点が集まるケースがある。そういったことで、都市機能自体が変わってくる。それは人が変えていくことなので、そういった人材、国際産業人を育成することによって、都市が変わってくるのかなと、これは理想ですけども。

安彦委員長

そちらの都市計画については、教育はその一環に位置づくでしょうから、都市づくりの方

は、政治家の方に議論してもらおうこととして。

菊池委員

ただ、切り離して考えるというのはできないのではないかと思います。計画だけで終わってしまうから。どこに活躍する場があるか、もちろん自分自身で作り出すのが大事なのですけれども、地域で作り出すことも平行してやる。一緒にやる必要はないと思いますが、議論としては、ロジックとしてつなげながら、それぞれの立場の人たちがきちっとした流れの中で作っていく、最終的には、今の子ども達の将来を見据える全体的なプランニングになってくるのかなという気がします。

安彦委員長

地域の内と外というのは、教育界の中では難題の一つで、村から出て行く人材でよいのか、村に留まって、村を変えてくれる人材が欲しいのか、そこで現実にはみんな悩んでしまう。今まで、日本の教育はこの点に苦勞して来ているのですけれども、実際、国際人というので何をイメージするのかですね、国際企業というか、その種の企業のトップは何を言うかというのは、いくつか見えていますけれども、必ずしも、語学がべらべら喋ればいいものでもないということは、よく言います。でも語学ができていたほうがいいに決まっています、語学力が必要なのですけれども。

菊池委員

そこでやはり、自分が育った国なり、市なり、先ほど言いました郷土愛。そういったものがきちっと根付いているかどうか、言葉はツールでありますので、ツールで説得、いわゆる理解させることができるか、それは中身の問題なのでツールと、コンテンツ両方一緒にやらなきゃいけない。

安彦委員長

おっしゃるとおり、両方しっかりやらないと、片方に偏ると非常に響きを買うこともある。他には、いかがでしょうか。

北條委員

極端な例としては、先ほどのバカロレア。そういう人材を輩出することで、国際人に近い人を育成できるのかなと。

安彦委員長

だいたいIB出身者は、国連とか、ある意味、国を離れたような国際機関に就職しちゃう人がかなり多いようです。全員といったことはないですけど、そもそもIBというのはインターナショナルスクールの卒業者のために作っていますので、言ってみれば国籍がないのですよ。ですから、中身から見ても、どこの国のってというのが言えないようなものな

ので、そういう意味では新しいタイプの国際人作りをしている。そういう人が必要な時代で、そういう人材を我等は作るという、一部のコースで作るというのは、アメリカなどでは普通です。アメリカのハイ・スクールは主だった所にはIBコースが大抵あって、そこは少しレベルの高い、外交官とか、医者の子どもとか、意識の高い親の子が、そのコースに入っているというのが多いので、そういう意味では、その子の生地に戻るとかという発想はあまり無いですけれども。そういう意味で、新しいタイプの人材を作るということも視野に入れて一向に構わないし、それでむしろ横須賀が評判とっていい訳です。地域に戻らなくても、大いに活躍してもらえればありがたいという訳ですね。そういうことも含めて結構だと思います。他には。

小野寺委員

ちょっと過激な言い方になるかもしれませんが。最初に申し上げておきます。資料7の教員の異動状況についてなのですけれども、私も10年以上の身でありますので、あと数年後には横須賀総合高校を異動するように言われている一人です。実際に今まで何年も、2年前までまったく野放しの状態で、「いるだけいいですよ」的な、何も私たちに、話のない状態から、突然去年10年以上経っている者たちは異動しなさい、しかも50歳以上は、県立の高校にも行けませんということで50歳以上は、市内の小学校、中学校等に異動しなさい、というような指令がでました。それが今年、言い方がやわらかくなりまして、そうとは限らないよと、県立に行けるかもしれません、という形の言い方に私は聞こえたのですが、実際は変わっていません。そういう状況の中で、今50代が非常に多いです。放っておいてもどんどん退職していきます。それも踏まえて異動しなさいと、戦力がなくなかった時に、来る人のことを考えた時に、来る人は、県立の普通科か、市内の中学校からぼつぼつという形です。だったら、横須賀市の独自の取り組みとして、新採用の若い先生を入れてください。本当に切に願っております。うちの学校に来ている先生は、ほとんど30代、40代の先生ばかり、下手すると50代も、中学校から来ています。20代の先生はいません。本当にそういう状態なので、私たち50代の退職を待っていても罰はあたらないのではないかなと思います。本当にそれだけのことはやってきたつもりなのですけれども、今異動を激しく言われております。だったら、もう一回言いますが、若い新採用の先生を入れてください。もう一つの問題はうちの学校が総合学科で、「産業社会と人間」という授業があったり、先ほどあったキャリア教育の中で、進学する生徒だけではないので、大学に進学したり、専門学校に行ったり、就職したり、専門学校に行くにしても、色々な受験制度があるのです。大学もそうです。一般受験、指定校推薦。そういう生徒達を、全部担任が、一人一人指導していく訳です。それはものすごく大変なことなのです。全日制普通科のほとんど進学する生徒だけの担任の先生よりも、私のはるかに大変だと思っております。こういうスキルを上げていかなくてはいけない中の、勉強もしなくてはいけないし、「産業社会と人間」という自分が持っている教科以外の勉強もしなくてはいけない、そういうものが身につくのは、3年4年5年経ってからなのです。今10年という、これは要綱で決まっているということですので、それはもう仕方ないと思いますけれども、中に入っている先

生達が、担任として、または横須賀総合高校の教員として、一人前の仕事ができるのは、本当に5年くらい経ってやっとかなと、一回りして一回担任やっている間も勉強で、必死になってやっています。ということなので、その辺をわかって若い先生を入れていただくような、まずそこから考えていただけたらなと考えております。

安彦委員長

強い要望が出ました。人事は大事なことで、先ほど管理職の話もできましたけれども、2、3年で辞めていくというのは、ここだけの話ではなくて、全国的な問題なのですけれども。勤務年数を何年にするかというのは、色々な問題があって難しいのですが、だいたい、10年というのは、比較的長い方ですよ。ですから、そういうかなり強い求めが上からあったようだけれども、基本的に、今言った5年というのは、あるいは3の2倍の6年という、そういうのは考えるべきではないかなと、一つの視点として必要じゃないかなと。他にいかがでしょう。

下川委員

教員の人事異動のことなのですが、前回の委員会の時に、先生方の異動状況の資料が欲しいと言いました。私は小学校の校長をしています。大量退職の時代です。毎年、大学を出たばかりの新規採用教員が、二人、二人、二人と3年連続入ってきています。皆優秀な若者ですが、やはり育てるのが大変です。その先生自体が、いい大学を出ていて、知識を持っていても、子どもに教えるノウハウというものは全く別物だと、私は思っていますから、若い先生を育てるといっては、とても大変です。今横須賀総合高校でいい成果がでて、これだけ優秀な生徒達がたくさん育てているのは、私も地元でみていますから、それは先生達の教育力、先生の資質がいいのではないのかなと思っています。ただ、前から噂で、横須賀総合高校の先生達の人事が滞留しているということは聞いていますので、私が思うに、前回、今回と中高一貫の話はでていませんでしたが、これを根本的に打破するためには、中高一貫ということを考えてもいいのではないのかと思うのです。通常の人事を促したとしても、今と同じような人事システムでは、なかなか半数近い教員が、異動対象の10年に至っているという現状を、上手に打破するという事は難しいと思っております。そして、もし中高一貫ができたならば、中学部というものができれば、市内の中学校の先生達の異動の輪の中に入りますから、高等部の先生が中等部に異動もできます、中学の免許状も持っていますから、その逆もできます。人事交流という視点からはいいのではないかと思います。質も高まるのかなと思います。今は高校だけですけれども、将来的には小学校6年生が行きたい学校になるというのが、横須賀の公立の学校が変わるという点でもいいと思っております。

安彦委員長

面白い問題、新しい視点が入ってきましたけれども。

赤羽根委員

今そういった、中高一貫の話と、小学校6年生が魅力ある学校という話がありましたが、総合高校自体が、総合学科ということで、ひとつ魅力があるじゃないですか。ここまでの10年間でさらにその魅力を深めるということですので、先ほども話がでております、専門的な就職先であったり、専門課程への進学といったことも魅力なのですけれども、市内の中学生に対して、アピールが非常に少なく、近くに、横須賀高校、横須賀大津高校ありということになると、学力的にいうと、偏差値は近くの県立高校の方が上なので、行ける生徒であればそっちに行きたい、ただ専門性を求めるなら、総合高校に行こうと、いうところなのですが、その先の入学してからのケアですとか、そういうところももっともってアピールしたり、独自性があってもいいのかなと、さらに、先ほど入試の話がありましたが、市内に優しくしてしまうと、刺激が少なくなって、まったりしちゃうという不安が、僕にはあります。逆に、市外からも来てもらえるような魅力のある、先ほど、金沢総合と比較しても、横須賀に来るのだという小野寺委員からお話しありましたが、そういうことも、比較して魅力で勝っているという一つの特徴であると、ですから、どこを比較して横須賀にしたのかというのを検証したり、その部分をのばしたりとか、ということも必要ですし、市立高校が1校ということは、横並びに足並み揃えるということも必要ないと思うのですけれども、県立高校との取り合いということは配慮しなくてはいけないと思うのですけれども、そういう意味では独自性を持った入試スタイルとか、先ほど話が出たスポーツで推薦というの、よく私立ではある話ですが、そういったものも手法として取り入れてもいいのかなと思いました。先ほど、山岸委員から回答いただきました、定数法で教員の数が決まっているという話がありましたが、小野寺委員の話ですと、あれもこれも業務が多岐に渡っていると、お話をお聞きするだけでもかなり負担に感じるのです、異動について決まっていたり、法律で定数が決まっていたりするのですけれども、我々がなんらかの手助けができればいいのですけれども、改定していくような提案をしていく必要があるのではないかと感じました。

安彦委員長

今の定数法の話は、最低の数ですので、今は、それ以上ならば各県、市のレベルで人数を変えられます。最低を定数法で決めているので、お金を人事にかけられる地教委は、あっちこっちで人数を増やして色々やっておりますので、これは、財政上の関係もございしますが、基本的には最低ラインだと思っていただいてよい。今のようなお話、ご提案があれば検討していただけると。ほかにはいかがでしょう。

松本委員

先ほど、若い先生入れてほしいという意見と、若い先生がいると大変だという意見がありましたけれども、今、横須賀総合高校の先生になりたいという手をあげる、先生の卵は横須賀市にはいないのでしょうか。もの本では、あまり総合高校には手を上げる人が少ないという本を読んだことがあるのですが、横須賀ではそのようなことあるのですか。

事務局：教育政策担当 河野

明確にはお答えできないのですが、昔、田中委員がいらした頃は、教員志望で県立高校の採用枠を受験し、合格をした方が、市立工業高校や、市立商業高校や、市立横須賀高校に来られていたと認識しております。10年前に、3校が一緒になった時に、定数法より多い人数を横須賀市として、抱えていて、教員の給料は全部市の財政です。それで、退職や異動で、だんだん定数法に近づいてきた。ですから、横須賀総合高校に行きたくて受験をしてきているかは、まったくわからない。それに、実際、定数より多いので、横須賀総合高校へというのが無かったということで認識しています。

中山委員

私が答えるべき問題でもないのですが。その辺はかなり本校の課題だと思っておりまして、人事を担当する所とはかなりやり取りをしているところなのです。結論的にお話ししますと、初任者では現状横須賀市は取れない。先ほどの県立高校との異動の問題とも絡んでいて、高等学校で経験してきた教員が、高等学校にいけないというものが、あまりいいものではないから、県とやり取りをしてほしい。それとやはり、新採用を採ってほしいとずっと話してきているのですけれども、神奈川県教員採用試験の募集要項の中に横須賀市立の高等学校を募集するとはひとことも載っていない、中学校にも載っていないし、高等学校にも載っていないということが、今年度はっきりして、現状で横須賀市が初任者を採用することができない。そこは、担当課の方で、県とやり取りをしてもらっていて、次年度の募集要項には何らかの、可能になるような方策を取ってほしいと、こちらからも要望しておりますし、引き続き県の方とも協議していくと聞いていると聞いております。

安彦委員長

むしろ制度上の欠陥ですね。それは早急に改善しないと、人事が色んな面で困りますね。

松本委員

僕が読んだ本の中に、先ほど小野寺委員からあったように、普通の学校より色々スキルが必要なので、新任の先生は総合高校にいきたがらないというような傾向があると、書物で読みましたので、横須賀でもそういうことがあるのかなと思いましたが、今の話では制度上の問題だということがよくわかりました。ありがとうございました。

安彦委員長

私も一般論では、小野寺委員がおっしゃったように、負担も大きいし、スキルも他の普通科よりもいっぱい力があるので、そういう意味で苦勞してでも、という方はあまりいないという事実だと思います。全体の空気として。

北条委員

会社の中でも、新人歓迎というところと、新人嫌だというところがあります。それは受け取る方の、育てて使ってあげようという努力というか、受け取る方によって、いいところに入ったのか、そうじゃないところに入ったのかありますので、似ているような感じがしました。やりようかなという気がします。

田中委員

校長さんの人事の裁量権がないのですよ。私は中学校ですが、校長の人事の裁量をもう少し広げてくれば、中山委員の高校にこういう人材が欲しいのだと明確にできる、前から個人的には思っていたのですけれども、

安彦委員長

制度上は、横須賀総合高校に限らないですけれども。

田中委員

そうですが、そういうのを強くつけてもらって、強すぎても困るのですけど、ほどほどのものでないといけなかなと思います。自分が作ろうと思っても作れないのですよ。来た人を教育して、色々なものに沿ってやっていくのですけれども、なかなか今の学校教育は大変で、市立高校は市で一つですから、横須賀市全体で、よしこういうようにやっていこう、力を持った責任者が必要だと思います。

安彦委員長

これは教育委員会の課題ですね。

菊池委員

今色々お話聞いていて、ちょっと乱暴かもしれませんが、この場で改革のイメージを作ったとしても、それが具体的に落とされた時に、制度上の制約が非常に、絡まって、結局実現できないということが多々あるのかという感じもしました。そうなってくると、改革というドラスティックなものを、求めるとすると、教育特区くらい、それくらいの規制緩和を絡めた体制のもとに、色々な先ほどの人事制度の問題ですとか、組織マネジメントの問題ですとか、教員のスキルの問題ですとか、そういったものを全て考え直して、現場も課題というものが、でていると思いますので、そういったものを吸い上げて、先生方が、教育に専念できて、目的に対して、真摯に対応できるか、それ以外の問題をここで対応できるか、色んなシステムを総合的にやっていかないと、中々、議論したものを具体的に落としてもそれは実行できない、という印象を受けましたので、特区ということを行いましたけれども、それくらいの規制緩和を方向性の視野に入れながら、議論をしなくてはいけないのかなと印象をもちました。

安彦委員長

大変良い視点というか、ご意見だと、私は思いますが、それでさえ、中々容易ではないのですけれども。

吉田委員

今、全日制の話だったのですが、定時制の話でもいいですか。定時制と、中高一貫の話の二つをさせていただきたいと思いますが、横須賀には、定時制高校として、横須賀高校、追浜高校、それから、横須賀総合高校があるわけですが、中学校で、残念ながら不登校の傾向にあった子どもが一番、魅力的というか、面倒見てもらって、力の弱いとか、厳しい子が通えている、そしてとても楽しそうに中学校に報告にきてくれているのが、横須賀総合高校の定時制だと思っています。支援教育で横須賀が掲げている部分はとても生きているな、ありがたいなと思うので、前にPTの時もお話したのですけれども、この中の教育指導目標、指導目標ではないでしょうけれども、定時制のところに、支援教育の部分をあまり知られてないのですね。でも実際のところは、本校公郷中学校にも相談教室という通級学級があるのですけれども、その中で今進路指導していると、県立高校の定時制に行っても怖い、厳しい、だけれども、横須賀総合高校に行くと、とても良い雰囲気というものもあるので、是非そういうところも表に出てくる形を取られたほうがいいと思うことが一つ。もう一つ、中高一貫校については、中学校としてはですね、ここでこの先どのように議論を進めていくのかは不安です。言いつ放しの部分ならできるのですけれども、PTの時は中高一貫については、特別プロジェクトを組まれてそこで話をしないと、切り離してではないでしょうが、中期的な、長期的な目指すものの中に入っている。その中に入っていると、1回目の時にスケジュールのお願いをしたと思うのですけれども、今日はざっくばらんにですが、更に深めていくのならば、全日制、定時制とこういう事をやっているかと、もう一つものとして作って行って、決めていっていききたいな、これは中学から高校受験、それから小学校から中学受験というところの部分では大変厳しい状況もあると思う。色んな、意見を色んな所から出していただいて、決めていったほうがいいなと、感じています。以上です。

安彦委員長

一つの柱にはなるので、出していただいたほうが良い。そういう意味では、資料等で必要なものがありましたら、是非言っていただきたいと思います。私も昨日でしたけど、東京都立桜修館中等教育学校に行ってきました、これはその学校評議委員をやっていますので、様子はずっと見てきています。もともと都立大学の附属だったこともあるので、中学校から入れて中高一貫校にすることに対して、大きな反対はなかったようですが、やはり6年かけることに対する、色んな疑問点は出されてきました。どちらにせよ、入試の仕方については、非常に神経質になっています。また、6年間でどうしても都立高校は大学進学で数値目標を上げろ、というような都教委からの指導があるものですから、この辺が偏らないように注文をつけたりしているのですけれども、いずれにしても、今のところ

ろは、保護者、地域の人々の評価は高く、それほど、進学オンリーに特化していないので、やり方次第でうまくいくこともあると思います。これからどうなるかはわかりませんが、もう一つ、私個人は名古屋大学で附属の併設型の中高一貫校の校長をやりましたから、一言で言えば地域、あるいは保護者の理解と協力が大きいですね。その点は、子どもの様子がそれでぐっと変わってきますので。地域との関係は、中高一貫をやれば、またその時に種々の議論が必要になってくるということがありますけれども。

吉田委員

一つ落としておりました。先ほど定時制の部分で坂庭委員とはお話をしましたが、本校に今、中学3年生で、病気が理由で、院内学級まではいっていないのですが、子ども医療センターに通うお子さんがいます。県立の横浜修悠館高校、通信制の高校を受けることになっていますが、将来様子が良くなったら、横須賀の近くの、横須賀総合高校の定時制に戻れないかと、そういう進路の選び方がないかと、お伺いしたら、定時制の総合学科では、例えば横浜修悠館高校に、ITといますか通信で通っていて、その子が将来的に、状況をみて、横浜修悠館から総合高校の定時制に、単位移動ができるような道を是非、模索でもいいので、していただくとありがたいなど。というのを言うのを忘れました。そうすると、先ほどの戻ってくるということも含めて広がると思います。単位が違うので、難しいのはわかっておりますが。

安彦委員長

これは、大学での単位互換と同じ問題があって、相互に学校どうして認定しあわないと、いけないことがあって、その辺の制度作りというか、それが関係してくると思います。

吉田委員

全日制が無理だというのはわかるのですが、定時制で状況がある子に対して、そこを広げてくれるようなご努力をいただきたい。

安彦委員長

ご検討をお願いしたいと思います。確認ですけれども、今、横須賀総合高校は、市外からの入学者はないのですか。認めないのですか。

中山委員

いえ、全県枠無いです。確認では、今の1年次320名中、90名くらいが逗子、葉山、三浦、横浜の市外からきております。

安彦委員長

これは普通とすれば、他の典型的な高校と比較すれば多い方ですか。神奈川県全体が数値的にわかればお話しください。

中山委員

学校の位置する場所にもよってくると思います。横浜市と近い学校なら横浜市に通ってきますけれども、比較的、横浜市から通いにくいところなので、一概には比べられないと思います。

安彦委員長

他にはいかがでしょう。もうそろそろ、あと1問くらい。

坂庭委員

定時制のことお褒めいただいたので、若干補足といいますか、かつて定時制の学校というのは、勤労学生とか定職を持っていて、働いて学ぶという方が多かったです。今はほとんどの生徒は、そういう方いないのですね。アルバイト程度をやっていて、吉田委員からあったように、不登校傾向だった生徒さんが、かなりの人数うちの学校には入学してきています。総合学科ということで、中学までの科目という訳でなく、色々な科目があるということで、生徒達は安心して、楽しんで科目を選んでいますし、人数も少人数で学習しておりますので、そういう意味では担任の目が行き届いて、生徒達も相談ができ、安心できる学校ということで、中学時代全く学校に行けなかった生徒達が、非常に楽しそうに、人が変わったように生き生きとやっている生徒達がたくさんいます。そういう意味では、うちの学校は非常に良いのかなと思うのですが、一部ある中学校の先生方から、中高一貫になったら定時制高校はなくなってしまうという声はまだ聞こえてくるのです。そんなことはありませんと話をするのですが、そればかり先走りして定時制はなくなってしまうという、保護者や中学校の先生の中にまで話している先生がいますので、困った話だと思っているところでは。

安彦委員長

そのように、噂だけが先行してしまうと、困るのですが、何も決まっていない。今まさに議論している訳ですので。一長一短ありますから、これからの話だと思いますし、今後中間まとめに入る段階で、次回、色々まとめてみて、たぶん一つに絞るということにはならないように思います。そういう意味では、この段階で、たくさん出していただけたことが、私としてありがたいと思います。時間がきておりますので、この段階で議事1については、ここまでとさせていただきます。

本日、委員の皆さまからいただいたご意見は、事務局で整理し、中間まとめ的な、次回の議案になるものを素案として、事務局に作成してもらいます。

また、時間がなくて出せなかった意見などについては、事務局へお送りいただくことでお願いしたいと思います。

それでは、「2 その他」に移ります。事務局からありますか。

事務局：教育政策担当 菱沼課長 ※スケジュール表を配付

審議お疲れ様でした。ここで事務局から、委員のみなさまにお願いがございます。第1回の会議において、本検討委員会のスケジュールについて、25年度に3回、26年度に4回とお願いさせていただきました。

しかしながら、第3回から第4回までの期間が開いてしまうことや、26年9月に答申をいただくことになると、答申いただいた内容について、27年度以降の取り組みを検討する時間が少なく、また予算化など慎重に検討を行う必要があることを考えますとともに、9月の市議会第3回定例会に報告を行いたく、できれば、25年度内にあと2回加えさせていただき5回とし、26年度に2回という開催計画の変更をご承認いただけないでしょうか。

また開催時間につきましても、次回からは、十分にご審議いただくために、時間が必要な場合には、大変恐縮ですが、会議の時間を少し長めにとらせていただくことを併せてご承認いただきたいと思います。よろしく申し上げます。

安彦委員長

元々の資料のとおり、全体の回数は変わっておりません。4回、5回というのを、26年度に回していたものを、25年度中にするというので、市長及び議会の関係でそういうことにしてほしいとのことですので、この点はご了解いただけますでしょうか。

一同了承の意

安彦委員長

ありがとうございます。時間のことにつきましては、2時間というのが、本来の時間なのですが、今回でも、時間があればもっとご意見いただけるということも考えまして、少し、30分とか延ばさせていただくのがお願いできたらと思ひまして。今の段階で、次回は30分くらい延ばさせていただいて、議論をきちんとまとめさせていただけたらと思ひますので、よろしく申し上げます。

それでは本日は、私の方では全て終わりましたが、なにか事務局から連絡事項等でご説明ありますか。

事務局：教育政策担当 栗野主査

それでは、事務局から連絡事項などについて、ご説明いたします。

まずは、追加意見の送付についてです。先ほど委員長からもお話いただきましたが、本日出せなかったご意見などにつきましては、11月8日（金）までに、メールにて、事務局までご送付いただければと思ひます。

追加でいただいた意見につきましては、整理したうえで、各委員に情報提供させていただきます。

次に、会議録についてです。会議録につきましては、前回と同様、作成でき次第、確認用のものを送付させていただきます。内容をご確認いただき、修正がある場合は、送付文に

記載の期日までにご連絡ください。確認できました後、ホームページと市政情報コーナーで公開いたします。

最後になりますが、次回会議の開催予定です。第3回の横須賀市立高等学校教育改革検討委員会は、12月18日（水）午後1時30分から、今日と同じこの横須賀市役所301会議室で開催する予定となっておりますので、ご出席のほどよろしくお願いいたします。以上でございます。

吉田委員

毎回確認させていただいておりますが、間違えるといけないので、11月の5日に市内の中学校長会がありますので、先ほどの坂庭委員のお話で、中学校の校長で、まだそんなことを言っている人がいるので、訂正をします。もしかすると、私の前回の伝え方がいけなかったかと反省もしますが、どこまでの資料を11月5日の校長会で出していいかということで、毎回聞いていますが確認です。

事務局：教育政策担当 河野

全ての資料を出していただいて、結構でございます。市政情報コーナーに会議録とともに、市民の方にも見ていただけるように出しますので、よろしく申し上げます。ただ、会議録が11月5日は間に合わないかと思えます。申し訳ございません。

吉田委員

スケジュールもよろしいですか。

事務局：教育政策担当 河野

はい。結構です。

吉田委員

これだけのものを、校長会で出しても、読みきれないし、説明しきれない。私にももらえる時間は、5分～10分くらいのもので、前もって、メールで渡しておいて読んでおいてもらうということをしております。そういうことをご理解いただければと思います。

安彦委員長

この点について、他に質問はありますか。よろしいですか。無いようですので、今回はこれで第2回の横須賀市立高等学校教育改革検討委員会は終了させていただきます。ご苦勞さまでした。

以上